JUNE 2006

鶴見大学文学部ドキュメンテーション学会

NEWS LETTER

Documentation No.3

ドキュメンテーション

新学会長より
学生の声
BOOK REVIEW
新任技術員紹介
活動報告

デジタルの世紀を生きる若いひとへ

学会長　長塚　隆
Takashi Nagatsuka

様々なメディアやコンテンツなど社会の情報基盤のデジタル化とインターネットに代表されるネットワーク化の急速な進展により、デジタルの世紀とも言われる２１世紀が始まりました。このような時に、鶴見大学文学部に４番目の新しい学科として、当ドキュメンテーション学科は２００４年４月にスタートしました。岡田教授が、学科新設以来、主任・会長として、学科と学会の運営の中心を担ってこられましたが、学科３年目の本年４月より、私が担当することになりました。皆様とともに、学会の行事や活動の内容をさらに充実させて行きたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

学生のみなさんがこれから生きて行く２１世紀は、科学と技術が大きく発展し産業の時代といわれた２０世紀に比べても、社会全体のデジタル化・情報化が急速に進展して新たなデジタル情報社会の時代に入るであろうと予測されています。デジタルの世紀になるであろう２１世紀で活躍できる若い人を育成するために誕生したドキュメンテーション学科では、学生全員に貸与されたノートパソコンを活用した授業以外にも、学生と教職員で構成される学内学会であるドキュメンテーション学会を通じて、若い学生のみなさんが幅広い学識を養えるよう、様々な取組みをしています。

若い学生のみなさんが、学会で企画される講演会や見学会などの諸活動に積極的に参加されることはもちろんですが、さらに、一歩進んで学生委員のみなさんだけでなく、１年生から３年生までの全員が企画の提案や立案に積極的に参加することを期待しています。

学会では、ドキュメンテーションに関わる諸科学の学際的研究を推進し、相互の研鑽を積むという目的を達成するために、講演会や見学会の開催あるいはニュースレター「Documentation」の発行などを行ってきました。これらの行事を通じて、学生のみなさんにとって通常の授業などでは得がたい様々な体験ができたのではないかと思っています。

学会では、このような目的を達成するために、この分野での第一人者である慶応義塾大学教授細野公男先生（現名誉教授）や筑波大学教授植松貞夫先生をお招きして講演会を開催してきました。また、国際化が進展するなかで学ぶ学生のみなさんが海外の研究者と直接触れ合い、議論が出来る場を提供したいとの思いからデジタルライブラリー国際セミナーを企画してきました。第１回は米国シモンズカレッジ図書館情報学大学院 Ching-chih Chen 教授、第２回はシンガポールのナンヤン工科大学コンピュータ工学部 Lim Ee Peng 準教授、第３回は国連図書館 収集・情報処理課長の佐藤 純子氏と各界で国際的に活躍されている方をお招きして国際セミナーを開催してきました。見学会は２回目となった印刷博物館のほかに、神奈川新聞社・テレビ神奈川の見学会、撮影技術の見学・研修会が行われました。多くの学生のみなさんが積極的に参加し、実体験から多くのことを学べたようでした。

３年目を迎えて、学年を超えた交流も活発にしてゆきたいと考えています。特に、３年生のみなさんは大学生活の後半に入り、学業の集大成としての卒業論文と卒業後の進路について同時期に取り組むことになります。新たな体験や経験を学会の活動に反映し、より一層内容を充実させて行きたいと思います。学会の行事への学生会員のみなさんのより積極的な参加を期待しています。

学生の声

—ＬＡ・ＤＤコース選択—

新学会長より
学生の声
BOOK REVIEW
新任技術員紹介
活動報告

将来へ向けて

満田 優（３年）
Yuu Mitsuda

ドキュメンテーション学科の１期生として入学し、早くも３年目を迎えました。３年生ともなるとコース選択、夏のインターンシップ、そして卒論の研究室選びと、大きな選択を迫られます。ここでは、私がデジタルドキュメンテーションコース（ＤＤコース）に進むことに決めた経緯を紹介したいと思います。

自分がＤＤコースを選択した最大の理由は、単純にＤＤコースの内容を「おもしろい」と感じたからだと思います。「そんな理由で？」と思う方もいるかも知れませんが、何かを学んでいく上でこれは非常に重要な事だと考えます。そう思うきっかけになったのが、初級システムアドミニストレータ（シスアド）という資格の取得を目指し勉強していた時のことです。

正直な話、自分は DD コースに興味を持ちながらも入学当時コンピュータについての知識はほとんどありませんでした。そんな中自分の知識の向上を目指し、先生方のアドバイスをいただきながらシスアドの勉強を始めました。いざ参考書を開いてみると、そこには聞いたことのない単語の群れと、高３の時に決別したはずの数式が待っていました。しかし、知らない事を学んでいくうちに、勉強を「おもしろい」と思えるようになっていきました。

結果的にシスアドの試験には、合格点をとりながらも受験番号のマークミスにより落ちてしまいました。「合格点をとった！」というのは負け犬の遠吠えにしかなりませんので、皆さんも重要な場面では見直し等を怠らないように気をつけてください。

話が逸れましたが、試験の勉強で得た知識により今ではＤＤコースの勉強が楽しく感じられます。３年になりコースが分かれると、内容はより専門的になります。ＤＤでもＬＡでも、自分が興味を持ち頑張れると感じたコースを選んでみてはどうでしょうか。

BOOK REVIEW

ジェイ・デイヴィッド・ボルター 著
『ライティング スペース 電子テキスト時代のエクリチュール』
（黒崎 政男・下野 正俊・伊古田 理 訳　産業図書 1994 年）

本書は、電子文書を論じた哲学書として、文学はもとより、工学分野からも高い評価を得ている名著である。出版された 1991 年（原著）は、インターネットがまだ大学研究室の、一部の人に利用されていた時代である。にもかかわらず、筆者の考察は現在でも十分通用する。しかも、本書にある内容が、あたかも新しい発見かのように、今でも発表されることがある。ドキュメントに関する基本文献として、ぜひ一読して欲しい。（大矢 一志）

＊鶴見大学図書館の請求番号は 007.63/B（開架・一般）

ＬＡコースに進む

波多野 恵（３年）
Megumi Hatano

ドキュメンテーション学科には二つのコースがあり、私はその中でライブラリーアーカイブコース（ＬＡコース）を選択しました。

最初の２年間は、コンピュータと書誌学の基礎を平行して学んでいました。どちらの分野も完全な畑違いにあるのではなく、資料管理という点において古典籍の取り扱いとコンピュータによるドキュメント処理は関係してくる面があります。

この学科は司書・司書教諭課程の科目がほぼそのまま専門科目として組み込まれており、それぞれの資格が取得しやすい環境になっていますが、それも情報や文書について広範囲に学べるためだと思います。

私がＬＡコースに進んだ理由は本が好きだったことと、古い文献を内容や物理的性質について調べた上で、コンピュータを用いて処理するという所に魅力を感じたからです。さまざまな資料の専門家にいますが、歴史的な知識とコンピュータに関する技術を併せ持つことのできる専門家は珍しいのではないでしょうか。

３年生になって２ヶ月ほどですが、書誌学の総論である「日本書誌学」を中心に、その応用となる版本・写本の調査演習、「蔵書印概説」や「西洋書誌学」と講義は多岐にわたっています。日本の古典籍のみを扱うわけではなく、大陸からの文字の流入や紙の起源といったように、勉強する範囲がどんどん世界へと広がっていくのも特徴です。「本」そのものに関する研究といってもいいかもしれません。学ぶことが多くて混乱する時もありますが、なによりも書誌学の奥の深さに驚いています。

後期からまた新しい授業が増えますが、このまま勉強を続けていけば、より充実した講義が受けられるのではないかと期待しています。卒業論文についてはまだ大まかな予定しか立てていませんが、古典籍の目録をテーマに考えています。

情報検索基礎能力試験に合格して

角田 博之（３年）

「短期間で実力アップ！」「効率的に短期修得！」というのは、巷の学習塾や通信教育のＣＭで乱用される謳い文句の筆頭だが、現実に親や教員たちが神経を使っているのは、「如何にしてこの子を机に縛りつけるか？」であり、「如何にして継続して勉強させるか」である。

情報検索基礎能力試験の対策を、怠惰のうちに過した２年生の夏休みの、それも終盤になってはじめた私の悩みも、やはり継続力という点にあった。

勉強方法自体は、個性も工夫もへったくれもない。「テキストの内容を１日３ページずつ手書きでノートに写し（途中からこれでは間に合わないと思い、５ページに増やしたような気がする）、全部書き終えた後で、過去問に出てくる部分を暗記する」という力押しの方法だ。

ともすれば楽をしたがる自分をなんとかして机に拘束させる術、やらなきゃいけないけどやりたくない勉強をやるコツは、結局わかり易い（サボり辛い）目標を設定し、自分を努力させるのが、一番手っ取り早い勉強方法だと思う。また、それで試験に落ちたとしても落ち込まないようにするのも、重要なテクニックではある。

新入生に向けて

佐藤 育也（２年）
Ikuya Sato

入学当時、私はお世辞にもドキュメンテーション学科というものに理解を寄せてはいなかったのだろう。コンピュータを使うとは聞いていたが、まさかあれ程だとは予想もしていなかったのだ。

例えば、学科の特色に入学に際して学生にノートパソコンの貸与が行なわれるということがあるが、これが私にとって鬼門だったのだ。今まで触ったこともない物を渡されたばかりか、あまつさえ授業で使えというのであるが、そうそう使えるわけがない。しかし、教師陣も鬼ではない、私をはじめとする初心者たちに向け、補習授業を組んでくれたのである。来る日も来る日もタイピング練習、その度私は手書きの方が余程効率が良いのではないか、といぶかしむことがしばしばあった。

今でこそその考えは逆転しているものの、その当時の私は簡単な文章を打ち込むのにも苦戦し、四六時中もどかしさに駆られていた。モニターの中に手を突っ込んで、直接この手で文字を書き込めたらと、いったい何度考えただろうか。私とモニター上の文字の間には、液晶一枚よりもっと厚い壁があり、ずっと遠い距離があるように感じていた。

学科の門を叩いて早一年、長いようで短かったその日々を振り返ると、何とも色濃い日々であった。が、今にして思えば、あの補習の日々が、ドキュメンテーション学科の学生としての私を培ってきたのではないかと考えるのである。

ドキュメンテーション学科
―２年生になって―

一年間

大胡 昌子（２年）
Shoko Ogo

私は大学に入り、部活とアルバイトを始めました。１週間のうち６日学校に通い、部活とアルバイトが３日か４日入ってるので、１ヶ月で完全な休日は１日あるかないかになってしまいました。ですが、毎日をだらだらと過ごしていた高校時代に比べればとても充実した日々だと思います。

部活は弓道部に所属しています。大学に入るまでまったくかかわりの無かったものですが道場まで見学に行き、先輩方が実際に弓を引いている姿を見て入部を決めました。

入部してからしばらくして練習が始まりました。私たちの学年の未経験者は 15 人で、指導係である２人の先輩に主に教えていただいていました。第１段階はパンツゴムとヒモで作った道具で基本の形を作り、ある程度出来るようになると第２段階のゴム弓に移りました。ゴム弓は木の棒や、元々弓だったものにゴムチューブをつけたものですが、勝手が違うせいか今まで通りには出来なくなってしまいます。そして、そのゴム弓が正しく引けるようになると、いよいよ弓での練習を始めます。ここでも、最初は矢を使わずに、次に矢を使って離さずに、さらに巻き藁 (という道具) に向かって離す練習、そしてその先に射場での練習があります。パンツゴムでの練習を始めてから射場で引けるようになるまで約３ヶ月ほどでしたが、その短い期間がとても重要だったと思います。

２年生になり新入部員が 10 人ほど入りました。そのなかの半分以上の人が未経験で、私も含め４人の指導係で教えています。１年生を教えながら１年前の私はこんな感じだったのかなと思い出し、たった１年の経験しかない私が未経験者に教えていることに感動してしまいます。

１年前の私に多くのことを教えてくださったのは２年生の先輩方でしたが、これからは自分がその２年生になり１年生にいろいろなことを教える番です。これからはより自分の行動に責任をも持って過していこうと思います。

■見学会 2006.2.10

神奈川新聞社 http://www.kanaloco.jp/
テレビ神奈川 http://www.tvk-yokohama.com/

新聞のレイアウトの方法は、私たちが使うパソコンの操作とほとんど変わらず、技術よりもレイアウトのセンスに重点が置かれていると聞き、なるほどと感心した。

（３年　山田雄輔）

今回の見学会では時間の都合でできなかったけれど、記者の方々のお話も聞いてみたかった。自分の足で情報を集め、編集作業もするというのは、すごいと思うからだ。

（２年　関根敦子）

テレビ番組の制作では１分間のシーンを編集するのに１時間、３分間に５時間かかると聞き、意志の強い人でなければ勤まらない仕事だと思いました。

（２年　塙　洋輔）

今まで何気なく見ていた新聞の記事にしろ、テレビの番組にしても、時間をかけた下調べによってできあがったもので、１行、１分に多くのエキスパートたちが携わっていることがよくわかりました。

（２年　井上雄貴）

テレビ、新聞どちらの制作にもコンピュータをさまざまな場面で有効に、効率的に利用しているのを見て、ますます２年生からはじまるドキュメンテーション学科の専門科目授業へのやる気が涌いてきました。

（２年　森谷奈保子）

TVK では編集作業に関わる人たちの話をうかがうことができたが、エンジニアとしてのプロ意識を持った方が多く、自分の将来の職業としてもとても興味を持った。

（２年　佐藤明水）

スタジオで番組のセットを見た感じと、テレビの画面で見た時の違いに驚きました。もう少し大きいものと想像していたけれど実際は小さく、あのサイズで番組ができるのかと意外に思いました。音声も設備が整っているところで聞くと音が違うなと感じました。

（２年　北見梨佳）

印刷博物館見學

４つのイドの向こう側

仲戸川莉沙（１年）
Risa Nakatogawa

今まで私の中で『博物館』といえば、静かな館内、少し薄暗い照明、整然と並んでいる展示物、その普段とは違う雰囲気の中で眠気に襲われるのが常でした。ですからきっとまた今回の印刷博物館見学会でも睡魔との闘いになるだろうと思っていたのです。しかし私の予想は見事に裏切られました。

館内に入ってみると、ただガラス越しに展示物を眺めるという形ではなく、実際展示物に手を触れることが出来たり、ボタンを押してみたり、ハンドルを回してみたり、虫眼鏡を覗いてみたり…。私達のほうから展示物に働きかける作りが多くありました。中でも四つの“イド”は印象的でした。

“イド”とは井戸のような形をしていて、覗き込むと不思議な音と映像の広がる世界が私達を待ち受けています。一つ目の井戸から順番に、まだ絵でものを伝えていた時代から、文字が生まれ、印刷の技術が発達し、未来のコミュニケーションの在り方までを見ることが出来ます。

特に漢字の誕生を紹介した二つ目の“イド”が私の心を強く引きました。漢字はものの形を抽象化して出来ていたりしますが、その抽象化の過程をアニメーションによるストーリー仕立てにして動きも交えて説明することによってとても分かりやすくなっていました。

二年、三年になると二つ目の“イド”と結びつくような文字学概説やマルチメディア演習などの授業が用意されているそうなので、少し先の話になりますが楽しみにしていようと思います。

多色刷りの文化

小泉 直人（１年）
Naoto Koizumi

特にこれが見たい、というものもなかったので、順路通りにぶらぶらと眺めていた。色々な展示がされていた中で私は当時の錦絵師の暮らしの再現や、多色刷りの模型展示に興味を惹かれた。

富士、空、海、それぞれに分けられて刷られていく様子を展示していた。それら全てを刷り終えると、葛飾北斎の「富嶽三十六景」が完成された。当たり前のことだが、色が違うということは、その分だけ刷らなければならない、ということだ。

言葉で説明するのは難しいのだけれど、たい焼き機を想像してもらえると分かってもらえるだろうか。たい焼き機のように両側が彫られているわけではなく、上部のみが彫られていて、下部は用紙の位置を合わせるようになっている。そうして景色の一つ一つが刷られていく様子はとても面白かった。ただ悔やまれるのは、その展示の照明が暗く、見辛かったことだろうか。

多色刷りというのは、刷る色の順で色が微妙に変わるらしく、当時はその中で一番美しく刷れる順で刷られていたという。しかし現代において、この順というのは正しくは判明していないらしい。今に続く多色刷りの職人の方たちは、これが正しいと思う順番で錦絵の技術を今に残しているそうだ。

■第３回デジタルライブラリー国際セミナー

国連図書館 収集・情報処理課長　佐藤 純子 氏

ダグハマーショルド図書館と国連文書

http://www.un.org/Depts/dhl/

今日のお話で、ますます図書館司書になりたくなりました。国連図書館は、一般の人々には開放されていませんが、それでも外部の機関に資料を提供したり、Ｅメールによって質問を受け付けたりと工夫をこらしていることにやりがいを感じました。（１年　太田有香）

国連文書記号は複雑で難しい。国連図書館の職員の方々は、あれを覚えて必要な情報を検索しているのでしょうか。すごい！　（１年　岩木聡子）

書籍等の保存も大切ですが、電子化が進み、国連文書の掲載物等の分類・整理には一層スピーディーさが求められていることがわかりました。（２年　井上雄貴）

「Collections to Connections」という国連図書館の新たな方針は、すべての図書館に言えることです。ただ収集するだけでは、利用者が本当に必要としている情報を与えられないと思います。　（３年　安田　恒）

新しい方向性。それは図書館は本を収集するだけでなく、またインターネット等を活用した電子的なつながりだけでもなく、人間的なつながりを目的としていることを知りました。　（３年　小林沙知）

今後私に国連文書を必要とすることがあるかどうかはわからないけれど、一度ホームページを見てみたいと思いました。日本の首相のスピーチも読むことができるとは知りませんでした。ニュースでは一部分しか伝えられませんので興味があります。（３年　鶴田綾子）

最近学科の授業で「図書館はサービス業だ」ということを聞きました。今日の講演で紹介されたダグハマーショルド図書館はまさにサービスを仕事としているような図書館だと感じました。この考えが日本でも浸透すれば、みんなが持つ図書館のイメージも一新されるだろうと思いました。司書を目指す私にとって、とても刺激になる話でした。　（１年　渡辺はるか）

新任技術員紹介

上野 文子　Fumiko Ueno

４月から実習技術員として着任しました上野文子です。

これまではＰＣを楽しく使う仕事 ― Web デザイン、デジタル・ペイント、ゲーム企画等 ―をしていました。

ですので授業の予習・復習や故障等トラブル時だけではなく、ＰＣを使ったイラスト、アニメ、ゲーム等マルチメディアコンテンツの制作、ＰＣの自作等、さまざまな事柄に対応可能です。

授業とは関係ないけれどＰＣについて知りたいことがある、そういう時は気軽に声をかけて下さい。どうぞよろしくお願いいたします。

平成 17（2005）年 10 月 –18（2006）年６月

ドキュメンテーション学科・学会活動報告

新学会長より
学生の声
BOOK REVIEW
新任教員紹介
活動報告

２月１０日（金）

神奈川新聞社・テレビ神奈川見学会（5ページ）

後期試験終了後、神奈川新聞社とテレビ神奈川を訪れました。新聞の編集現場や撮影スタジオ等を見学させていただきました。神奈川新聞社の柳澤定治氏、神奈川テレビの井原美保子氏に案内をしていただきました。

４月５日（水）

平成１８年度新入生入学式

今年度の新入生は７５名。３年目を迎え本学科もずいぶんと大所帯になってきました。

４月２２日（土）

ノートＰＣの貸与及び説明会の開催

新入生にノートＰＣを貸与し、初期設定をし、使用上の注意点を説明しました。常日ごろから持ち歩いて、授業以外の学習にも大いに活用してもらいたいと思います。

５月１３日（土）

印刷博物館見学会（6ページ）

昨年に引き続き、新入生全員と２、３年生の希望者で印刷博物館へ見学に訪れました。学芸員の中村 麗さんに博物館の説明をお願いしました。

> あらゆる技術が古代からあったことは知っていましたが、印刷技術という視点から歴史を見ると、その時々に何を求め、求められていたか、理解できそうな気がしました。
>
> （見学会感想文より　１年　稲葉朋子）

５月３０日（火）

第３回 鶴見大学デジタルライブラリー国際セミナー開催（7ページ）

国連図書館 収集・情報課長の佐藤純子氏をお招きして「ダグハマーショルド図書館と国連文書」と題する講演をしていただきました。

６月２４日（土）

ドキュメンテーション学会総会及び学生交流会の開催

今年度の事業計画等を検討。また、以下２０名の学生委員が新たに選出されました。

3年 浅見真衣、角田博之、木下昌宏、鶴田綾子
長谷川直哉、満田 優、2年 大石美穂、勝又美保、
佐藤育也、豊田真央、仲谷令奈、宮川太陽、
森谷奈保子、1年 岩崎龍一、遠藤秀一、栗原雄太、
佐久間大、平野秀和、藤原秀平、和田 晃

総会後、１～３年生の交流会を開催。昼食をとりながら楽しい時間を過しました。

※活動報告の詳細は学科ホームページ（http://ccs.tsurumi-u.ac.jp/seminar/docu/）でご覧になれます。

■ 第４号は１０月末日発行の予定です。原稿・写真を募集しています。編集委員へお問い合せ下さい。

■ 編集委員
〔学生〕3年 大沢悠一・橋本安菜・2年 中澤大輔・目野吉美
1年 白倉弘崇・室屋理恵
〔教員〕岡田　靖・伊倉史人

ドキュメンテーション　第３号
平成１８（2006）年６月３０日（金）
鶴見大学文学部ドキュメンテーション学会
横浜市鶴見区鶴見 2-1-3（〒 230-8501）
☎ 045(581)1001（代表）発行責任者：長塚 隆
http://ccs.tsurumi-u.ac.jp/seminar/docu/